



「文化遺産」を 後世に伝える

平泉世界遺産登録記念式典



主催者を代表してあいさつする菅原町長

「平泉の文化遺産」の世界遺産登録記念式典（町、町世界遺産推進協議会主催）が11月8日、文化庁や外務省、県や自治体関係者、地元関係者など約180人の出席の下、文化遺産センターで開催されました。

式典に先立ち、世界遺産登録推進に尽力した中尊寺前貫首の千田孝信さん、元町長の鈴木清紀さん、前推薦書作成委員会委員長で福島大学名誉教授の工藤雅樹さんら物故者に全員で黙とうをささげました。

あいさつでは、主催者を代表して菅原町長が登録にかかわった関係者や町民などへの謝意と、遺産を後世に守り継いでいくことを決意。引き続き、近藤誠一文化庁長官が記念講演を行いました。近藤長官は、ユネスコ日本政府代表部特命全権大使時代からの平泉との縁について触れながら、日本文化・思想の特質をよく表している平泉の価値を世界に発信していくことが、文化の力で世界に貢献することにつながるかと語りました。

世界遺産登録の意義について 近藤文化庁長官が講演



平泉の世界遺産登録について講演する近藤誠一文化庁長官

登録の意義

平泉の世界遺産登録の意義は、京都や奈良だけでは語り尽くせない日本文化や伝統的思想が持つ、次の4つの価値を世界に知ってもらうことにある。

①自然観

人間を自然の一部と見え、自然を受け入れる。（欧米では人間は自然を超越するものと考えられる）

②あいまいさを受け入れ善悪で片付けることを嫌うこと

伝統芸能から現代のアニメーションまで1000年の善人・悪人は登場しない。（欧米では白黒はっきりしている）

③絶対的な平和思想

清衡公の「供養願文」にあるように、敵味方区別なく、虫や鳥など生あるものを尊重する。敵味方区別しないのは②の考え方もあてはまる。

④多文化の吸収と洗練化

他文化を受け入れるだけでなく



講演を聴講する式典参加者

自国の形に昇華・洗練化していく。たとえば日本の仏教は自然信仰と融合していった。

平泉は①④のいずれも見事に体現している。

毛越寺をはじめとする自然を表した庭園、敵味方区別しない平和思想、自然信仰と融合した仏教の教えや、世界各地からの輸入品。柳之御所遺跡をはじめ追加登録を目指す資産にも目に見えない形で清衡公の思想が反映されている。しかしながら①④すべてを併せ持つことで皮肉にも価値が複雑化し、3年前には外国人にうまく

今後の課題

伝えることができなかった。そうした中で、今回の世界遺産の推薦では、外国人にも価値が分かりやすく伝わるよう①と④に焦点を絞り込み、それがユネスコの世界遺産の基準にもうまく合致した。

今後の課題は、第1には世界遺産条約の目的に沿った遺産をしっかりと保護すること。

第2には遺産を保護することの重要性を孫子の代まで伝えること。

加えて、もう少し大きな視点では、今回の推薦では我々が最も重要と考える②③の特質を主張せず、それが資産の絞り込みにもつながったと言える。今後は、平泉を見に来る外国人や専門家に、10の資産で平泉が体言されることを理解してもらい、同時に日本文化や伝統的思想が持つ4つの価値を発信していくことが平泉の責任であり権利であると考えられる。

やや大げさに言えば、そのことが、日本が経済力などではなく文化や思想により世界に貢献することにつながる。

それができるのが、世界遺産に登録された平泉である。（一部抜粋）

はじめに

登録延期からの3年間は、決して無駄ではなくむしろプラスに働いたように思う。

大変なご苦労があったと思うが、専門家に任せるのではなく、住民が、どうしたら世界に平泉の価値を説明できるかを考える良いきっかけになった。

世界遺産委員会の決議では「3年で登録を成し遂げたのは素晴らしい」という一文が加えられた。住民の努力や涙を飲んで絞り込みで外れた資産も報われる決議であり、追加登録に向けての励みにもなった。